

なんで「生き字引うらない」なの？

問題提起2

消えていくマチの個性



現在、日本のどこでも似たような建物が立ち並び、スーパーマーケットなどで同じ商品が手に入り、インターネットで同じ情報が手に入る…。どこも似たようなマチになってしまっているように感じます。また、少子高齢化によってマチの個性といえる伝統的な祭りや地域行事の廃止が目立っています。これらのことにより、マチの個性は今後さらに消えていってしまうのではと考えました。

問題提起1

かたよっていく情報



昔は、ご近所付き合いなどから世代間の交流も多く、様々な知識や考え方を知ることができました。しかし今は、昔と比べて他世代との交流は少なく、情報の多くをインターネットで得るようになっています。この変化によって、自分ではアクセスしない情報や、インターネット上には無い情報に触れる機会が少なくなってしまうように感じます。

仮説2

ヒトの営み＝マチの個性



マチの個性は、特産品、産業、豊かな自然などで表現することがほとんどです。しかし、そのマチで暮らすヒトもその土地にしかない重要なマチの資源なのではと考えました。「ヒトの営み」に価値づけができれば、マチの個性を新しい角度で残していけるのではと考えました。

仮説1

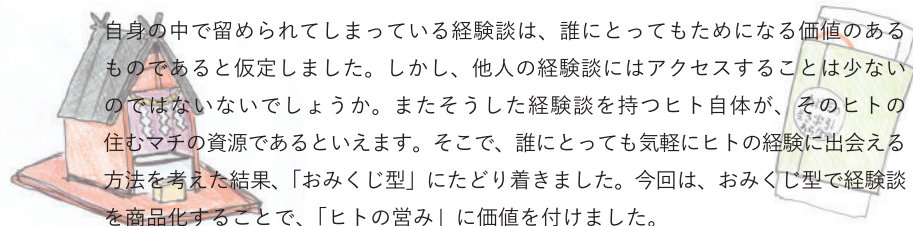
知ること視野は広がる



インターネットでさまざまな情報が手に入るようにはなりましたが、個人の経験談やマチに伝わるエピソードは、なかなか自らアクセスしないのではないのでしょうか。しかし、知らなかったことや考えられなかったことに思いを馳せることは、自分の視野を広げるために大切であると考えました。

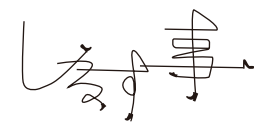
実施

おみくじで「ヒトの営み」を残す



自身の中で留められてしまっている経験談は、誰にとってもためになる価値のあるものであると仮定しました。しかし、他人の経験談にはアクセスすることは少ないのではないのでしょうか。またそうした経験談を持つヒト自体が、そのヒトの住むマチの資源であるといえます。そこで、誰にとっても気軽にヒトの経験に出会える方法を考えた結果、「おみくじ型」にたどり着きました。今回は、おみくじ型で経験談を商品化することで、「ヒトの営み」に価値を付けました。

しるす事



人生訓を使って マチの個性を考える

ヒトはそれぞれ独自の人生から経験を積み、そこから得た信念を持って生活しています。エピソードは自身の中で留められていることがほとんどです。しかし、自身の経験談は他のヒトのためにもなると考えました。また、そうした経験談を持つヒト自体が、そのヒトの住むマチの資源であるといえます。しるす事では、竹田に住む方々へのインタビューを重ね、得られた経験談を「竹田の生き字引うらない」にまとめて竹田ならではの情報を発信しました。また、インタビューや、史料をもとに「竹田大年表」を作りました。「竹田大年表」を話のきっかけとし、教えていただいた実体験を年表中に書き込み、将来に残るような資料を作りました。

ディレクター

加藤 里歩 同志社大学
政策学科
2年生

メンバー

小仲 涼 京都府立大学
日本中国文学科
3年生

橘田 果歩 京都工芸繊維大学
デザイン建築学課程
3年生

竹田 朱音 京都工芸繊維大学
デザイン建築学課程
3年生

松山 由美 北海道大学
森林科学科
3年生

生き字引うらないができるまで！



笑楽日さんのご協力

シニアと生き字引うらないを折る
夏キャンプ中、2回にわたりデイサービス・老人ホームの笑楽日で「生き字引うらない」を折る会を実施。笑楽日の利用者さんと一緒にお話しをしながら一緒に折ったり、シールを貼ったりしました。この2回のイベント以外でも、笑楽日の利用者さんにご協力いただき、たくさん「生き字引うらない」を折っていただきました。みなさんとても手際よくきれいに折ってくださいました。この会以外でも、夏キャンプの期間中に継続的におみくじを折っていただきました。

聞きこみ



思い出話から人生のヒントを得る
たくさんの方に、「生き字引うらない」に書くお話をうかがいました。人生の先輩方のお話はとても説得力があり、学ぶことが多かったです。また戦争など、今ではできない経験をしていらっしゃる方も多く、やはりそういったエピソードは残すべき貴重なものであると実感しました。



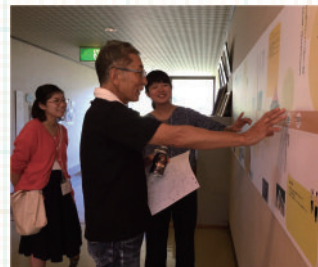
どんなインタビューをしたの？

「1番幸せだったときの話」「1番努力したときの話」などをうかがい、仕事・結婚・育児などの経験や、そこから得た考え方や信念を教えてくださいました！

竹田大年表

年表から思い出す記憶
「生き字引うらない」を制作するにあたって、たくさんの方のエピソードを集める必要がありました。しかし記憶を思い出すのはなかなか難しい。そこで、竹田で起こったことを年表にまとめました。年表に書いてある出来ごとをきっかけに当時の竹田や自身のことを思い出してもらいました。また、「竹田大年表」には書き込みができるスペースを作り、個人のエピソードも書き込めるように工夫しました。今は個人のエピソードにすぎないですが、これらは将来、貴重な資料になるかもしれません。

年表中の「昭和38年豪雪」の文字をきっかけに「自分の家の2階から出入りしていたんだよ」と実体験を教えてくださいました！



「明治38年竹田で馬車を初めて利用」という文字をきっかけに「自分も嫁入りは馬車で来たよ！」と当時の様子を教えてくださいました！



Point.1

竹田のシンボルの1つである水車があしらってあります。

Point.2

字は竹本藤子さんと竹田裕喜子さんに書いていただきました。

Point.3

竹田の方にうかがったエピソードや、そこから得た考え方が書いてあります。

エピソード一覧

- 第1番 考え次第で物事は変えられる
- 第2番 腹が立ったら一呼吸置いてから言う
- 第3番 今やらなくてはいけないことをやる
- 第4番 無理はしすぎないように
- 第5番 楽な姿勢だ
- 第6番 善因善果 悪因悪果
- 第7番 2つのことを同時にはできない
- 第8番 他人は偉大
- 第9番 小さな失敗を重ねれば大きな失敗はしない
- 第10番 100パーセントいいなんてない
- 第11番 苦手なことは習慣にすればいい
- 第12番 信念を突き通す
- 第13番 理想だけで終わることは多い
- 第14番 人の考えも尊重する
- 第15番 ただ誠実に生きる
- 第16番 自分で選べば後悔しない
- 第17番 人はそれほど変わらない
- 第18番 今はこれまでの集合体



Point.4

竹田に伝わる伝説や、生活の様子などのこぼれ話が出ています。

ここに入っています！



ご利益がありそうな真つ赤なほころを手作りしました。



取り出すと…



第1番

考え次第で物事は変えられる



日々を過ごす中で、私たちは本当に多くの人との出会いを経験します。その中には自分とは合わないと思う人もいるでしょう。そんなとき、この人とは相容れないと決めつけて遠ざけてしまうのはとてももったいないことです。もしかしたらその人があなたとは違う角度で物事を捉えているが故に、合わないと感じているだけかもしれません。でももしその人の考えや思いを理解できたら、嫌だったものを好きになれるかもしれません。知らなかった幸せに気づくことができるかもしれません。考え次第で、物事はいくらでも変わっていくものです。

身近な地名の由来を知ると吉。

竹田にあるたけくらべ山に雄の龍が、竹田川には雌の龍が住んでいた。恋愛関係にあった二匹だが、様々な障害により、会えなくなってしまった。ついに、会えない事を悲しんだ雌の龍は大泣きをし、嵐を巻き起こした。やがて、嵐による雷雨や土砂崩れにより湖ができた。湖は不思議なことに、二匹の龍が絡まった形をしていたため、龍ヶ鼻池とよばれた。現在、その場所は龍ヶ鼻ダムとなっているが、不思議なことにダム落成式の日も、雨が降りしきったそう。 (諸説あり)



たけだの生き字引うらない

1話 100円
全 18種

普通のおみくじとは異なり言葉で人生のヒントを得ることから「たけだの生き字引うらない」と命名しました。



ディレクターインタビュー

プロジェクトを通して 自分を知りました

しるす事ディレクター
加藤里歩（いぬは）

「最終的には「生き字引うらない」という1つの形にまとまりましたが、そこに至るまでかなり迷走した期間もあったそうです。

「周りのメンバーが学校で学んでいる分野への興味からプロジェクトを決める中で、私は特に関心事が見つからずにいました。ただ、自分自身の成長につながるのではという思いからディレクターになることを決めたので、考えるときは苦労しました。」

「確かにアートや文学、建築なんかと違って、政策学は目に見えないコトづくりに関する学問で、自分の学びを

プロジェクトに活かしていく分野だと思えます。では最終的にそこをどう乗り越えて、自分の何を活かしてプロジェクトを作ったのでしょうか。

「昨年参加したいわい事を振り返り、私は『竹田の外と中をつなぐ仕組みを作ること』や『人の温かさを発信すること』に興味があると気づきました。これらのキーワードから始まり、建築や文学を学ぶプロジェクトメンバーにさまざまな話をしてもらい、そこから私の中の『好き』や『問題意識』を抽出していきました。それら

を組み合わせた末にしるす事が誕生しました。」

「他分野の人たちとじっくり考えて竹田で実践する楽しさや、さまざまな方に協力してもらい成し遂げる楽しさをディレクターを通し経験しました。その苦労の先の達成感を次の代に引き継ぎたいと思い、決意しました。」

地域の声 / 畑清隆さん

人づてに聞いて、「生き字引うらない」をキャンプ場に引きに来た方がいらっしやいました。残念ながら引き上げた後で引いてもらえませんでした。今後も続くのであればまたぜひ置いて欲しいです。

地域の声 / 竹田裕喜子さん

私たちの知らない竹田のことを書いてあったりして良いなと思いました。おみくじを引くことによって、お話との縁を感じるので良いアイデアだと思いました。

メンバーからのメッセージ!

この夏、たくさんのお話をお聞きました。そのどれもが私の知識や経験にはないもので、私では見ることのできない世界を垣間見せてもらっているかのような気分でした。

りょうちゃん



オフショット
(上)「竹田の里秋まつり」にて「生き字引うらない」も置かせていただきました
(下)空いた時間には、他のプロジェクトメンバーとお喋りしながら「生き字引うらない」の手折り作業をしていました

結果

設置場所は竹田の内外に



たけだや



谷口屋



たけくらべ広場



一筆啓上茶屋

720人
に届きました
※2020年2月時点

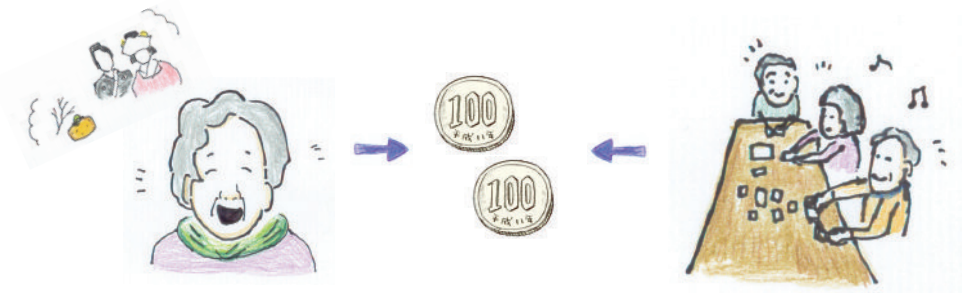


三国駅

竹田の中のみならず外にも「生き字引うらない」を設置することにより、たくさんの方々にヒトの経験談や1つのマチのエピソードを知るおもしろさを体験してもらえるのではと考えました。そこで竹田内では「たけくらべ広場」「たけだや」「谷口屋」、竹田外では「一筆啓上茶屋」「三国駅」に設置させていただきました。

未来像

新しいシニアのお仕事づくりへ



従来価値づけがされてこなかった「ヒトの営み」に対し、今回は「生き字引うらない」という商品にすることで「お金」という目に見える価値を創出することに成功しました。今後は、売り上げを笑楽日の利用者さんなど「竹田の生き字引うらない」を作るのに協力して下さった方々にお渡しして、シニアの小さなお仕事づくりになる仕組みづくりをしていきたいと考えています。